

中学校 教育相談

教師が保護者対応における自己効力感を高める研究  
—中学校における研修メソッドの開発と実践を通して—

教育相談課 研究員 山道 律人

要 旨

中学校教師を対象に、教師が保護者対応における自己効力感を高めるため、代理体験及び社会的説得が得られる研修メソッドを開発し、実践した。その結果を本研究で作成した、「保護者対応への自信」、「同僚との関係性」、「保護者対応への不安」の3因子、37項目で構成する教師の保護者対応自己効力感尺度を用いて分析したところ、教師の保護者対応における初期対応に対する自己効力感において有意な上昇が見られるなど、研修メソッドの有効性が示唆された。

キーワード：中学校 保護者対応 自己効力感 研修メソッド

I 主題設定の理由

教師の保護者対応について、河村（2016）は、「教育実践を良好に進めていくためには、保護者との適切な連携は欠かせない。（中略）保護者に理解者・協力者になってもらうには、プラスの評価を得て、信頼を獲得していく以外に方法はない。教師は現状を受け止め、適切な対応の仕方を身につけ、真摯に対応していくしかない。」と述べている。多賀（2017）は、「保護者の目が厳しくなり、教師への尊敬があまりない時代に教師としてやっていくのは大変だが、どうしても様々な保護者のニーズに応え、保護者にきちんと対応していくことが必要だ。」と述べている。Benesse教育研究開発センター（現ベネッセ教育総合研究所）（2013）「学校教育に対する保護者の意識調査2012」によると、保護者が学校に望むことの項目の中で、96.8%が「子どもの学校での様子を保護者に伝える」、92.7%が「保護者が気軽に質問したり相談したりできるようにする」、92.2%が「学校の教育方針を保護者に伝える」と回答している。このことから、保護者は学校・教師側からの情報提供と、子供についての相談がしやすい関係を築くことを望んでいることがわかる。従って、保護者対応には、学校・教師側からの積極的なアプローチが必要であると考えられる。

その一方で、愛知教育大学（2016）「教員の仕事と意識に関する調査」では、「中学校教師の54.6%が保護者や地域住民への対応についての悩みや不満がある」と指摘されている。筆者も、この指摘と同様に、保護者対応への不安、負担感、苦手意識を持ちながら16年間教師として勤務し、これを自己の課題の一つとしていた。

そこで注目したのが、Bandura（1977）によって提唱された、「自己効力感（self-efficacy／セルフ・エフィカシー）」である。自己効力感とは、「ある状況において、ある結果を達成するために必要な行動を自分がうまくできるかどうかの予期」と定義され、「個人がいかに多くの努力を払おうとするか、あるいは嫌悪的な状況にいかに長く耐えることができるかを決定する要因となる」と指摘されている。教師の保護者対応においても、自己効力感を高めておくことが重要であると考え、そのための研修メソッドを開発し、実践することで、保護者対応における自己効力感を高めることができるのではないかと考えた。

Bandura（1997）によると、自己効力感の向上には、①制御体験（過去の成功体験）、②代理体験（自分に似たような状況の人々を観察、モデリングすることで自分にもできそうだと思うこと）、③社会的説得（やればできるといった自己教示や、他者から励まされること）、④生理的、感情的状態（身体の状態や気分）の4要因があるとされている。

以上を踏まえ、本研究では、保護者に対応する教師の自己効力感を高めるために、Banduraの挙げた4要因のうち、他者との関わりの中で高まる②「代理体験」及び③「社会的説得」に焦点を当て、研修メソッドを開発することとした。子供の教育を共通目的とする教師の集団の中で、他者をモデルとして捉えて代理体験を行うことや、同僚からの励ましといった言語的説得を得ることは、保護者対応における教師の自己効力感を高めることに有効であると考え、本主題を設定した。

## II 研究目的

中学校教師を対象とした保護者対応についての研修メソッドを開発し、実践することを通して、教師の保護者対応における自己効力感が高まることを明らかにする。

## III 研究の実際とその考察

### 1 保護者対応自己効力感について

本研究では、保護者対応を、電話や面談などの直接的なもの、学級通信や学年通信、生徒を通じた連絡等の間接的なものとを合わせた、教師と保護者のすべての交流と捉える。また、自己効力感については、Bandura (1977) が提唱した、「ある状況において、ある結果を達成するために必要な行動を自分がうまくできるかどうかの予期」とした。

### 2 同僚について

本研究における「同僚」とは、管理職等の立場にとらわれない、「職場を共にする教師」とした。

### 3 教師の保護者対応自己効力感尺度の作成

教師の保護者対応における自己効力感の変容を数値化する方法を検討したところ、自己効力感尺度は先行研究に多数あるものの、教師の保護者対応に特化した尺度は見当たらなかった。そこで、新たに「教師の保護者対応自己効力感尺度」を作成した。

#### (1) 質問項目の収集

先行研究(坂野・東條, 1986), (成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995), (貝川・鈴木, 2006), (眞鍋・笹川・松田・北島・園田・種池・上野, 2007), (吉田・山田・森岡, 2011), (白岩, 2013), (吉田, 2016)にある尺度を収集し、重なりのある項目や表現を推敲し、89項目に絞った。

#### (2) 質問項目と回答法の検討

2017年12月に、県内の教職経験10年以上の小学校教師4名、中学校教師4名、高等学校教師2名の協力を得て、主旨が共通する質問の統合、質問表現、質問の妥当性、回答法について検討を重ね、加除訂正を行った。その結果、45の項目に整理され、これを「教師の保護者対応自己効力感尺度作成のためのアンケート」とした。また、回答法は、「非常によくあてはまる(4点)」「どちらかというにあてはまる(3点)」「どちらかというにあてはまらない(2点)」「全くあてはまらない(1点)」の4件法とした。

#### (3) 教師の保護者対応自己効力感尺度作成のためのアンケート実施

県内公立中学校10校の教師230名を対象に依頼し、2018年2月に、無記名による質問紙法にて実施した。そのうち199名の有効回答が得られ、分析対象とした。(有効回答率86.5%)

#### (4) 教師の保護者対応自己効力感尺度作成のためのアンケート結果の因子分析(表1)

前述のアンケート45項目の平均値と標準偏差を算出したところ、3項目に天井効果及びフロア効果が見られ、これらを削除した。続いて、42項目に対して、最尤法による探索的因子分析を行ったところ、2項目に著しく低い共通性が見られたため、これらを除外して再分析した。その結果、因子負荷が一つの因子について、.40以上で、かつ2因子にまたがって.40以上の負荷を示さない37項目を抽出した。各項目の番号を整理し、これをもって、「教師の保護者対応自己効力感尺度」の完成とした。

第1因子は17項目で構成されており、「保護者対応は、自信をもってやるほうである」、「保護者対応に、すぐに取りかかるほうである」など、保護者対応に前向きな感情についての項目が高い負荷量を示していたため、この因子を「保護者対応への自信」とした。第2因子は13項目で構成されており、「同僚に仕事の悩みを相談することができるほうである」、「目標となる同僚がいる」など、同僚との関わりについての項目が高い負荷量を示していたため、「同僚との関係性」とした。第3因子は7項目で構成されており、「保護者対応で、こまごまと心配りすることが面倒に感じることがある」、「保護者対応がうまくいかないと感じるほうである」など、保護者対応に慎重な感情についての項目が高い負荷量を示していたため、「保護者対応への不安」とした。

#### (5) 教師の保護者対応自己効力感尺度の信頼性の検討

各因子についてクロンバックの $\alpha$ 係数を算出し、信頼性を検討した結果、第1因子「保護者対応への自

信」は $\alpha = .937$ ，第2因子「同僚との関係性」は $\alpha = .906$ ，第3因子「保護者対応への不安」は $\alpha = .836$ という値が得られた。

表1 教師の保護者対応自己効力感尺度作成のためのアンケート 因子分析結果

		因 子		
		1	2	3
28	保護者対応は、自信をもってやるほうである。	.850	-.051	-.131
29	保護者対応は得意なほうである。	.836	-.032	-.267
20	保護者対応について、知識があるほうである。	.762	-.055	-.119
30	保護者対応は私の性分に合っていると思う。	.727	.062	-.328
2	急な保護者対応でもうまくできると思う。	.721	.017	-.184
16	保護者対応がうまくいったと感じることが多いほうである。	.703	.137	-.275
31	保護者対応を通して、学校に貢献することができると思う。	.688	.060	-.215
27	保護者対応に、見通しをもって取り組むほうである。	.668	.136	-.005
33	保護者への対応の仕方は、迷わずに決定するほうである。	.654	-.119	-.173
26	保護者対応に、すぐに取りかかるほうである。	.609	.280	-.041
32	保護者の情報について、把握しているほうである。	.608	.125	-.043
24	保護者対応には積極的に取り組むほうである。	.596	.368	-.242
5	同僚から頼りにされていると思う。	.593	.259	.042
34	難しい保護者対応であっても避けずに取り組むほうである。	.560	.208	-.398
19	保護者対応では周囲に大きな混乱を起こすことはないと思う。	.522	.173	-.274
1	以前より自分の保護者対応がよくなったと思う。	.508	.070	-.114
4	同僚が保護者対応について困っていたら、相談に乗るほうである。	.482	.265	-.017
8	同僚に仕事の悩みを相談することができるほうである。	.153	.751	-.019
21	保護者対応について、同僚からアドバイスをもらっているほうである。	.008	.737	.007
17	保護者対応で困ったことを、同僚に相談するほうである。	.106	.714	-.034
23	保護者対応についてわからないことを、同僚に質問するほうである。	.054	.713	.037
11	同僚は頑張りを労ってくれるほうである。	.002	.708	-.034
12	同僚は励ましてくれるほうである。	-.039	.696	-.047
14	同僚を見て、自分もまねをしたいと思うことがある。	.085	.675	.024
35	目標となる同僚がいる。	-.002	.609	.037
22	保護者対応について学びたいと思う。	.262	.583	.017
7	同僚と楽しく話ができるほうである。	-.029	.577	-.057
9	同僚に自分の仕事を認められることがある。	.288	.562	.066
6	同僚と打ち解けるのは得意なほうである。	.377	.551	-.017
25	保護者対応の価値観について、同僚と話すほうである。	.335	.475	.102
41	保護者対応で、こまごまと心配りすることが面倒に感じることがある。	-.205	-.134	.753
40	保護者対応がつまらなく思えて仕方がないことがある。	-.160	-.157	.732
38	保護者対応が嫌になって、出勤したくないと思うことがある。	-.110	-.035	.693
42	保護者対応については、心配性なほうである。	-.125	.166	.571
43	保護者対応には消極的なほうである。	-.489	-.110	.554
39	保護者対応がうまくいかないと感じるようになるほうである。	-.090	.148	.525
36	うまくいかなかった保護者対応を思い出して、暗い気持ちになることがある。	-.290	.130	.450

因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法<sup>a</sup>

a. 5回の反復で回転が収束しました。

#### 4 研修メソッドの開発と実施

##### (1) 教師の保護者対応に関する意識・実態調査の実施

研究協力校の教師の保護者対応に関する意識・実態を探るため、2017年8月に研究協力校の教師29名

を対象として、「教師の保護者対応に関する意識・実態調査」を実施した。この調査項目は、文献や調査（諸富・植草，2004），（Benesse，2013），（諸富，2013），（小野田，2013），（河村，2016）を参考に、「教師自身の保護者対応」，「学校組織としての対応」，「保護者対応への心理的負担」，「保護者対応をするために特に必要なもの」，「保護者と接する際に気をつけること」について，53項目で構成した。

注目したのは、「保護者対応をするために特に必要なもの」についての結果である。これは、「保護者との接し方の方法・知識の取得」，「教師としての経験」，「保護者対応について気軽に話し合える教師間の関係性」，「組織的な，統一感をもった取組」，「同僚のサポート体制」，「管理職のリーダーシップ」，「保護者と接する機会の増加」，「その他」の8項目から3項目を選択としたものであるが，上位3項目は，「保護者対応について気軽に話し合える教師間の関係性」79.3%，「組織的な，統一感をもった取組」51.7%，「保護者との接し方の方法・知識の取得」41.3%であった。この研究協力校の，2017年度の保護者による学校評価アンケートによると，「学校からのお知らせや学年・学級通信等を読んでいる」に対して，「よくあてはまる」，「おおむねあてはまる」を合わせた回答率は89%，「先生方は，生徒が安心して学校生活を送れるよう努力している」に対しては，同じく95%と高い評価が得られており，教師と保護者が良好な関係を築いていることがわかる。それでもなお，この研究協力校の教師は，より良い保護者対応のためには教師間の関係性が最も必要であると認識している傾向を捉えることができた。

## (2) 研修メソッドの目的

自己効力感を高める要因として，過去の成功体験からの「制御体験」，観察・モデリングによって自分にもできそうだとこの人のようになりたいと思う「代理体験」，他者から励まされる「社会的説得」，身体の状態や気分「生理的，感情的状態」の四つが挙げられる（Bandura，1997）。これらの四つの要因のうち，「代理体験」と「社会的説得」の二つが，研修によって得られるものと考え，それを目的とした研修メソッドを開発することとした。なお，前述の「教師の保護者対応に関する意識・実態調査」の結果も踏まえることとした。

### ア 代理体験

保護者対応事例に関する意見交換を通して，「このような保護者対応をしてみたい」，「この先生のようにになりたい」というモデルとなる同僚を探すことを目的とした活動を取り入れることにより，「代理体験」が得られるようにした。

### イ 社会的説得

保護者対応には，日頃から同僚関係をはぐくむことが重要（小坂・佐藤・末内・山下，2011）であることや，同僚からポジティブなフィードバックを受けることが自己効力感を向上させる（白岩，2013）と指摘されていることから，教師同士がよく話し合い，お互いの考え方や行動を認め合える活動を取り入れることにより，「社会的説得」が得られるようにした。

## (3) 研修メソッドの実施対象と時期

研修メソッドは，研究協力校の教師26名を対象に，2018年4月から8月の期間に実施した。内容は，1回約50分の「ロング研修」を3回，保護者対応について教師自身の対応のアイデアを書き込んで教師全員が共有する「回覧板研修」を3回，職員会議の中で15分程度を割いて行う「研修の振り返り」を3回で構成することとした。また，研修メソッド実施後の8月に，研究協力校教師を対象に自由記述式のアンケートを実施することとした。

## (4) 実施した研修メソッドの内容

### ア ロング研修

#### (ア) 第1回

生徒・保護者との最初の出会いである入学式・始業式前，4月5日に実施した。

まず，「傾聴技法の体験」では，教師同士がペアになり，片方は「最近うれしかったこと」を相手に伝え，もう一方は全く無関心な聴き方をする演習を行った。次に同じペアで，片方は「朝起きてから今まで」を淡々と伝え，もう一方はこの情報をまるで宝物のように，最大限に反応しながら聴く演習を行った。この体験を通して，生徒との相談活動だけでなく，保護者対応においても傾聴によって得られる情報が大きいということを再確認した。

次に，「保護者対応事例考察」では，保護者対応事例の映像『映像で学ぶ校内研修教材vol.1 保護者トラブル』（学事出版，2013）を見て，教師それぞれが気付いた対応についての意見をワークシートに記入した。その後，グループでもう一度映像を検証し，ディスカッションを行った上で新たな

意見を記入し、最後にグループの意見を全体に発表して共有した。

「保護者対応の仕方について同僚と一堂に会して話し合う機会はなかなかないので、いろいろな意見を聞くことができて良かった」、「話し合うことで、自分の着眼点が間違っていないんだな、そういう見方もあるのか、などと感じることができ、勉強になった」等の感想が得られた。

(イ) 第2回

夏季休業中の三者面談の準備を始める頃である、6月28日に実施した。「やってよかった！行ってよかった！三者面談」をテーマに、三者面談の技法・心構え・準備についての情報交換を行った。

まず、夏季休業中の三者面談を想定して、「ぜひやるべきこと」、「気をつけるべきこと」、「こんなときこうする」を個人で付箋紙に記入した。次に、4～5名のグループで、個人の意見の発表を基に、ディスカッションしながらまとめた意見を、大きなホワイトボード1枚にまとめて記入した。最後に、グループでまとめた意見を全体に発表し、お互いに感想を述べ合った。

「自分が何気なくやっていたことが、実はプライバシーの保護や信頼関係をつなげる上で大切なことだと再確認できた」、「自分がやってきたことの確認もできて、やる気が向上した」等の感想が得られた。

(ウ) 第3回

学期末の成績処理と通信票の作成、体育祭の指導等で数々の業務が重なる直前で、教師間のチームワークが必要な時期である、7月4日に実施した。自然に協力でき、同僚性が高まる活動を重視し、グループワークトレーニング（日本学校GWT研究会、2003）を行った。

「先生ばかりが住んでいるマンション」と題し、誰がどの部屋に住んでいるのかを、断片的な情報を基に推測していく、ゲーム性の高い活動を行った。異なる担当学年、異なる年齢層で7～8名のグループを構成し、普段コミュニケーションを図る機会が少ないメンバーの中で、課題の解決を目指すとともに、お互いの活躍を発見しながら活動を進めていく。課題が解決したときは大きな喜びを味わうことができ、さらに、その後にお互いの活躍を振り返り、発表する時間を設けた。

「他の先生と協力できることから、今後の職員間の信頼もアップすると思った」、「仕事の合間に少し話を交わすくらい同僚とも、自然に話し、関わるのができた」等の感想が得られた。

イ 回覧板研修

回覧板研修（学事出版、2017）は、教師全員が同じテーマについて、1回目の回覧ではそれぞれの意見を書き込み、2回目の回覧ではそれぞれの意見に対する意見や感想を書き込む、情報交換と共有のためのツールである。約1か月の間に2回の回覧で済むため、一度に長い研修の時間を要しない研修方法である。

3回の回覧板研修を通して、「一度自分で考えたあと、他の人の考えを読むことで、いろいろなアプローチの仕方を知り、自分の視野を広げることができた」、「賛同してくださる方がいらっしやっただので、私の考えや行動は1人ではないと思い、安心しました」等の感想が得られた。

(ア) 第1回（4月5日から4月23日）

新学期の授業が始まり、生徒が毎日持ち運ぶ学習用具や教科書等の数や重さが気になる頃であることから、「リュックが重い！」というテーマで実施した。参観日で来校した保護者に、「授業の道具が多くて、子供の通学リュックが重くて困っているんです」と相談を受け、その場でどのような対応をするかという課題である。

(イ) 第2回（4月25日から5月14日）

運動部活動に所属する3年生の最後の地区大会に向けて、部活動が忙しくなり、帰宅時間が遅くなる頃であることから、「帰りが遅い！」というテーマで実施した。自家用車で生徒を迎えに来た保護者に、帰りがけ、その生徒もいる前で、「部活動が時間通りに終わらなくて、子供の帰りが遅くて困ります」と相談を受け、その場でどのような対応をするかという課題である。

(ウ) 第3回（5月16日から6月15日）

1回目の定期考査の結果が返却される頃であることから、「勉強の仕方がわからない！」というテーマで実施した。学級担任や教科担任ではなく、保護者が話しやすいと感じている部活動の顧問教師が、「うちの子が、勉強の仕方がわからないって言っているんです」と相談を受け、その場でどのような対応をするかという課題である。

ウ 研修の振り返り

4月から6月、毎月下旬に行われる職員会議内で、「TSE（Teachers' Self-Efficacy／教師の自

己効力感)通信」を発行し、研修内容の共有を行った。T S E通信には、ロング研修での発表内容や教師全員の感想、回覧板研修の回答内容、次回のロング研修や回覧板研修の予告、研修への協力に対する感謝の言葉を含めた。

## 5 結果

### (1) 教師の保護者対応自己効力感尺度での事前調査と事後調査

研修メソッド実施前の4月と、研修メソッド実施後の8月に、本研究で作成した教師の保護者対応自己効力感尺度を用い、教師の保護者対応自己効力感の変容を調査した。

因子ごとの平均値の分析は、それぞれ、「保護者対応への自信」は2.47から2.50（最大値は4.00、以下同様）へ、「同僚との関係性」は3.01から2.93へ、「保護者対応への不安」は2.41から2.52へと変化した（図1）。この結果を基にWilcoxon符号付順位検定で4月と8月の値を比較したところ、それぞれに有意な差は認められなかった（表2）。さらに、40歳以上と40歳未満の教師、教職経験20年以上と20年未満の教師についても平均値の変化を分析したが、同様の結果であり、年齢や教職経験年数においても有意な差は認められなかった。

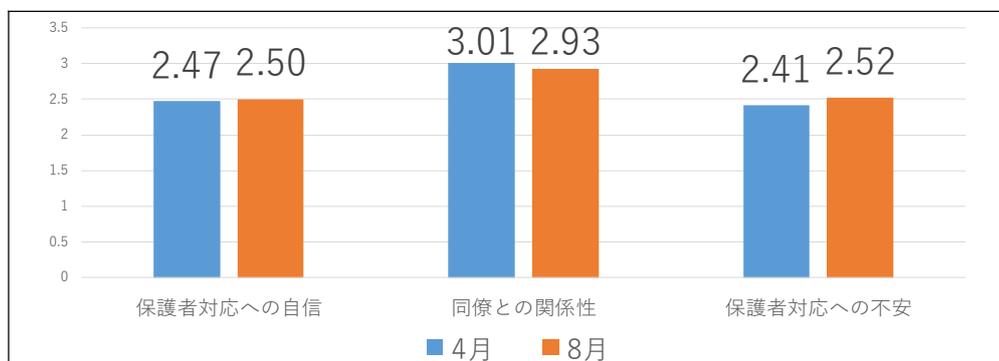


図1 「教師の保護者対応自己効力感尺度」の因子ごとの平均値

表2 「教師の保護者対応自己効力感尺度」の因子ごとのWilcoxon符号付順位検定

下位尺度	負の順位 N	負の順位 平均ランク	正の順位 N	正の順位 平均ランク	同順位 N	Z値
保護者対応への自信	8	12.81	14	10.75	4	-0.780
同僚との関係性	12	14.63	13	11.50	1	-0.350
保護者対応への不安	11	11.59	14	14.11	1	-0.947

次に、同尺度の37の質問項目ごとの平均値を分析したところ、「5. 急な保護者対応でもうまくできると思う」の1項目において、2.33から2.46に変化しており（図2）、Wilcoxon符号付順位検定で4月と8月の値を比較したところ、5%水準で有意な差が認められた（表3）。

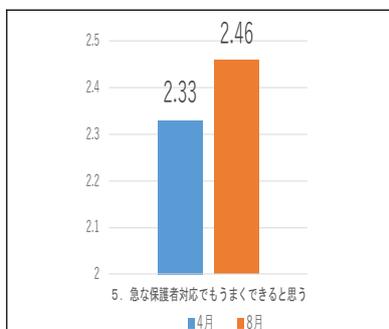


図2 「教師の保護者対応自己効力感尺度」の質問ごとの平均値（抜粋）

表3 「教師の保護者対応自己効力感尺度」の質問ごとのWilcoxon符号付順位検定（抜粋）

下位尺度	負の順位 N	負の順位 平均ランク	正の順位 N	正の順位 平均ランク	同順位 N	Z値
急な保護者対応でもうまくできると思う	2	6.00	9	6.00	15	-2.111 *

\*p<.05

## (2) KJ法による感想データの分析

研修メソッド実施後のアンケートで得られた教師の自由記述を、KJ法を用いて分析した。分析は、当センター教育相談課研究員4名で行った。その結果、三つのカテゴリーが得られ、また、複数の下位カテゴリーも抽出された(表4)。

まず、「課題の発見」では、研修を通して気付いたことや、今後の展望が述べられていた。「同僚との関係」では、活動の中での教師間の交流を通しての感想や、それによって得られたことが感想として述べられていた。「活動の感想」では、3回のロング研修それぞれについての感想や、保護者対応についての研修の意義について述べられていた。

表4 研修メソッドに対する感想データ

カテゴリー	下位カテゴリー	ローデータの例	
課題の発見	現状認識	・保護者が必ずしも納得しているわけではないということを感じた。	
		・学校としてのチーム力をもっと上げられたらと思った。	
		・教師の人柄が保護者対応に表れると思った。	
	今後の展望	・これからも、お互いの活躍の発見と認め合いを意識して仕事をしていきたい。	
		・機会をみて研修に励み、保護者、生徒が安心して過ごせる学校にしていきたいと思う。	
		・学会の方々や、エキスパートの資料がほしくなった。	
同僚との関係	交流の感想	・グループでのトレーニングやディスカッションができて良かった。	
		・なかなか話す機会がない先生と話すきっかけになった。	
		・同僚と一つのテーマについて話し合うことで、チームワークを高められた。	
	他教師の理解	・いろいろな考え方があると感じた。	
		・課題に対していろいろな方向から見るのができて良かった。	
		・他の先生方の意見や考えを知る良い機会となった。	
		・意見を出し合って、先生方の考えていることがわかって良かった。	
		・普段疑問に思っていることについて、たくさんの意見を聞くことができた。	
		・自分では思いつかない様々なアイデアを得ることができた。	
	世代間の交流	・若い先生方に助言、アドバイス等していく上で参考になった。	
		・年上の先生方から、貴重な経験談を聞くことができ、大変有意義だった。	
		・若手の先生方がどのように感じているかがわかって良かった。	
	活動の感想	三者面談研修の感想	・8月の実際の場面で生かすことができた。
			・他の先生方の三者面談の様子を知ることができた。
			・三者面談について参考になる意見があった。
グループワーク トレーニングの感想		・グループワークトレーニングでは、他の先生方とコミュニケーションを取ることができた。	
		・グループワークトレーニングが楽しかった。	
		・グループワークトレーニングがとてもおもしろかった。	
回覧板研修の感想		・同じ職場の方の意見を読むことができて、勉強になった。	
研修の意義		・保護者への声掛けや対応などを考える良い機会となった。	
		・どの研修も、教師として必要だと思った。	
		・なかなか考える機会が少ない保護者対応について検討、考察できたことが良かった。	
		・何気なく行っていることや準備することにいろいろな意味があることを感じた。	
		・職員間コミュニケーションを取る場が必要だと実感した。	
	・グループで話し合う研修を学校で行うことができたのは大変貴重な経験だった。		

## 6 考察

本研究では、教師が保護者対応における自己効力感を高めるために、「代理体験」と「社会的説得」を重視した研修メソッドを開発し、実践することにより、その有効性を検討した。

まず、教師の保護者対応自己効力感尺度の事前・事後調査の比較では、「保護者対応への自信」, 「同僚との関係性」, 「保護者対応への不安」の3因子すべてにおいて、平均値の有意差は見られなかった。

次に、教師の保護者対応自己効力感尺度の事前・事後調査を質問ごとに比較したところ、「5. 急な保護者対応でもうまくできると思う」の平均値に有意な差が認められた。「急な保護者対応」とは、丁寧な

初期対応が必要とされる、保護者からの訴えや相談への対応と捉えることができる。保護者対応には初期対応が重要であるということは、複数の教育機関（北海道教育委員会，2009，千葉県教育庁，2011，名古屋市教育センター，2012）が従来より指摘していることであるため，この研修メソッドは，教師による保護者対応の中で，初期対応に対する自己効力感を高めることに有効であると示唆された。

最後に，研修メソッド実施後の研究協力校の教師の感想の中に，「他の先生方の意見や考えを知る良い機会となった」，「自分では思いつかない様々なアイデアを得ることができた」，「年上の先生方から，貴重な経験談を聞くことができた」という記述が見られ，これにより，「このような保護者対応をしてみたい」，「この先生のようにになりたい」というモデルとなる同僚を見つけ，代理体験が得られたことが推測される。また，「お互いの活躍の発見と認め合いを意識して仕事をしていきたい」，「チームワークを高められた」，「職員間のコミュニケーションを取る場が必要だと実感した」という感想からは，お互いの考え方や行動を認め合える活動によって，「社会的説得」が得られたことが推測される。

#### IV 研究の課題

本研究では，自己効力感を高める4要因の中から，研修によって得られるものとして，「代理体験」と「社会的説得」を重視したが，前述のように，自己効力感を高める要因には「制御体験」と「生理的，感情的状態」も含まれる。教師の保護者対応自己効力感には，その教師のそれまでの教職経験に基づく保護者対応の成功体験や，その時点での身体的な健康・精神の状態も大きく影響すると思われる。よって，教師によって教職経験や健康状態が異なることを鑑みた研修メソッドの開発や尺度の検討が課題となるであろう。

さらに，本研究では，4月から8月までの教師の保護者対応自己効力感の変容を検証したが，時期によって教師の保護者対応の件数は増減するため，少なくとも1年を通した検証が必要となるであろう。

##### <引用文献・URL >

- 1 Benesse教育研究開発センター 2013 「学校教育に対する保護者の意識調査2012」  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/all.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/all.pdf) (2019. 1. 18)
- 2 河村茂雄 2016 『セリフでわかる保護者の安心・信頼につながる対応術 「先生でよかった」と言われる先手のひと言』，p. 3，合同出版
- 3 多賀一郎 2017 『大学では教えてくれない 信頼される保護者対応』，p. 3，明治図書
- 4 愛知教育大学 2016 「教員の仕事と意識に関する調査」  
[https://www.aichi-edu.ac.jp/center/hato/mt\\_files/p4\\_teacher\\_image\\_2\\_160512.pdf](https://www.aichi-edu.ac.jp/center/hato/mt_files/p4_teacher_image_2_160512.pdf) (2019. 1. 18)
- 5 Bandura, A. 1977 「Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change」  
『Psychological Review, 84』 pp.191-215
- 6 Bandura, A. 1997 『激動社会の中の自己効力』，pp. 2-6，金子書房
- 7 小坂浩嗣，佐藤亨，末内佳代，山下一夫 2011 「教師と保護者との連携に関する学校臨床心理学的考察－いわゆる「モンスターペアレント」との対応－」『鳴門教育大学 研究紀要第26巻』，p165
- 8 白岩航輔 2013 「自己効力感の向上プロセスに関する研究－人事社員を対象にして－」『神戸大学大学院経営学研究科 研究紀要2013』，p25

##### <参考文献・URL >

- 1 坂野雄二，東條光彦 1986 「一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み」  
[https://projects.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_uri&item\\_id=19&file\\_id=22&file\\_no=1](https://projects.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=19&file_id=22&file_no=1)  
(2019. 1. 18)
- 2 成田健一，下仲順子，中里克治，河合千恵子，佐藤眞一，長田由紀子 1995 「特性的自己効力感尺度の検討－生涯発達の利用の可能性を探る－」  
[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_10625022\\_po\\_ART0002071657.pdf?contentNo=1&alternativeNo=\(2019. 1. 18\)](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10625022_po_ART0002071657.pdf?contentNo=1&alternativeNo=(2019. 1. 18))
- 3 貝川直子，鈴木眞雄 2006 「教師バーンアウトと関連する学校組織特性，教師自己効力感」  
[https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=1482&item\\_no=1&attribute\\_id=15&file\\_no=1](https://aue.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=1482&item_no=1&attribute_id=15&file_no=1) (2019. 1. 18)

- 4 眞鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり, 北島謙吾, 園田悦代, 種池礼子, 上野範子 2007 「看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討」  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsnr/30/2/30\\_20070309003/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsnr/30/2/30_20070309003/_pdf/-char/ja) (2019. 1. 18)
- 5 吉田えり, 山田和子, 森岡郁晴 2011 「卒後2～5年目の看護師における自己効力感とストレス反応との関連」  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsnr/34/4/34\\_20110524007/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsnr/34/4/34_20110524007/_pdf/-char/ja) (2019. 1. 18)
- 6 白岩航輔 2013 「自己効力感の向上プロセスに関する研究ー人事社員を対象にしてー」『神戸大学大学院経営学研究科 研究紀要2013』
- 7 吉田梨乃 2016 「中学校生活における自己効力感尺度作成の試み」  
[https://shukutoku.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=1552&item\\_no=1&attribute\\_id=21&file\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=21](https://shukutoku.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=1552&item_no=1&attribute_id=21&file_no=1&page_id=13&block_id=21) (2019. 1. 18)
- 8 諸富祥彦, 植草伸之 2004 『カウンセリングテクニックで極める教師の技② 保護者とうまくつきあう40のコツ』, 教育開発研究所
- 9 Benesse教育研究開発センター 2013 「学校教育に対する保護者の意識調査2012」  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/all.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/all.pdf) (2019. 1. 18)
- 10 諸富祥彦 2013 『教師の資質 できる教師とダメ教師は何が違うのか?』, 朝日新聞出版
- 11 小野田正利 2013 『普通の教師が“普通に”生きる学校ーモンスター・ペアレント論を超えて』, 時事通信社
- 12 河村茂雄 2016 『セリフでわかる保護者の安心・信頼につながる対応術 「先生でよかった」と言われる先手のひと言』, 合同出版
- 13 学事出版 2013 『映像で学ぶ校内研修教材vol.1 保護者トラブル』 (DVD)
- 14 日本学校GWT研究会 2003 『学校グループワーク・トレーニング 3 ー友だちっていいな 自分っていいなー』, 遊戯社, pp. 59-66
- 15 学事出版 2017 『月刊生徒指導5月号』, pp. 42-45
- 16 北海道教育委員会 2009 「保護者等との良好な関係づくりのための事例集～要望等への適切な対応のために～」  
<http://www.dokyoι.pref.hokkaido.lg.jp/hk/gky/grp/05/hogoshatoutonoryoukounakankeidukurinotamenojireishuu.pdf> (2019. 1. 18)
- 17 千葉県教育庁 2011 「教職員の皆さんへ 学校問題解決対応能力の向上に向けて」  
<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/seisaku/documents/gm00.pdf> (2019. 1. 18)
- 18 名古屋市教育センター 2012 「保護者からの要望への対応の在り方ー学級担任による初期対応に焦点を当ててー」  
[http://www.kyosen.nagoya-c.ed.jp/kenkyu/center\\_kenkyu/h23/24pdf-houkoku/soudan.pdf](http://www.kyosen.nagoya-c.ed.jp/kenkyu/center_kenkyu/h23/24pdf-houkoku/soudan.pdf) (2019. 1. 18)